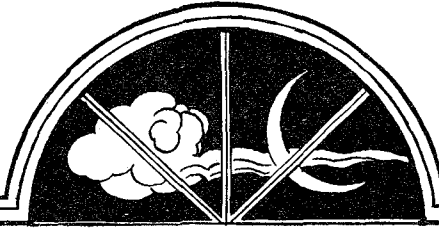


天



界

第百二十二號 (第十一卷) 昭和六年六月

秒に鞭うて

(巻頭言)

「秒に鞭うて!!」刻々みな機會、一瞬に成り、しかも一瞬に敗る。

何んと吾々現代人の心をうつ語ではないか。又なんとはつらつたる語ではないか。吾々は時の愛用者でありたい。時の濫費者であつてはならぬ。時の活用者であつてほしい。時は何人にもあたへられるものであつて、しかも何人にも活用され難いものではないか。

然し一面吾々は時の奴隷となつてはならない。「時は萬事を解決する」などと、無方針無計畫であつてはならぬ。なるやうになれといつた捨鉢的な考は最早過去の遺物であつて、文化の創造に精進せんとする現代人の斷じてかへり見てならぬことである。

本年も亦六月十日が來た。時の紀念日を迎へて、その昔天智天皇が志賀の里で、民のため、又政事をおたすけする多くの役人のため、漏刻をお造りになつて、新制をお開きなされたことが思ひ出される。眞に畏れ多い言ひ分ではあるが、天智天皇は頗る英邁にわたらせられ、又頗る新思想を御實行なされた天子様でゐらせられた。かの大化の改新といひ或は志賀の都の御建設といひ、これは皆天皇の御抱負の御實行である。これらを拜して、當時の意氣にもえた日本の姿をうかゞふことが出来るのである。

漏刻も亦天子御自身でお造りなされたものであつて、役人をして時を報

ぜしめられたのである。その昔、時を告げる鐘の音が琵琶湖の水を渡つて、ひびいて行つたのを思ふとき、實に新興日本の意氣をうかゞふことが出来るのである。當時の人々は、このひびきに時を與へられ、時を自覺し、刻々みな機會であることを悟つたことであらう。

歴史によると、天智天皇の漏刻の記録は前後二回ある。始めは皇太子にゐられた時、後は天皇即位十年の時、漏刻博士以下の役人を置いて、時を測り、鐘で報ぜしめられたとのことである。役人大臣はこれによつて政を始め、これによつて御殿を退出したことであらう。天皇御幸の時もなほ漏刻以下時を司る役人が行列に供奉して、正しき時を報ぜしめられたとのことである。實にこれが我が國での時の制度の最初であり、又時を測る精密機械の最初である。實に今日から約一千二百六十餘年の昔である。しかも六月十日が漏刻を御殿の新臺に置かれた日である。

「科學の進歩は法則を益々近似値たらしめる」とは物理學者ポアンカレの名言である。時計も一千二百六十年後の今日では、一千分の一秒の正確さの機械までも發明されて、人間業以上の正確さが測定されて、科學は極致へ極致へと進んで行くのである。

かくて現代人は科學に藝術に、又經濟の生活に、正確なる時を導入して、現代人の文化生活に時の觀念の重要性を益々感じつゝあるのである。

時の紀念日に際し、吾々はいたづらにお祭り騒ぎはよしたい。各人が、時の愛用者か、活用品であるか否やを反省したい。そして萬人平等に附與せられた時を各人が最も有効に、しかも正しくつかひたいものである。個性化された時の活用品とならねばならぬ。

秒に鞭うて!! 刻々みな機會である。而して文化の建設に努力せねばならぬ。(垂井増太郎)